



# ROUTE

## 北海道石狩郡当別町

急速な高齢化社会が進み、人や物の移動に不可欠な「交通」に注目が集まっている。

「あなたは10年後、どのように町を移動しますか」その問いかけとともに、これからの「交通」のあるべき姿が検討された北海道石狩郡当別町。平成21年地域公共交通活性化・再生優良団体として国土交通大臣表彰も受賞している同町の取り組みを紹介します。



石狩平野の中央に位置する当別町の地形は南北に長く、市街地が二極化している。また、札幌市や江別市といった都市に隣接していることなどから、自動車への依存が高い地域である。かつて、この市街地を結ぶ公共交通はJR以外には2路線のバスのみであった。このため町や企業、病院などが独自に送迎バスを運行していた。このような状況の下、複数の路線が重なる地域のバスを一元化し、コミュニティバスを運行させる案が浮上したのである。

平成17年当時、町が発行した「とうべつバス通信創刊号」がある。「当別町に便利なバスを運行させては」という大きな提案とともに、「あなたは10年後、どのように町を移動しますか」とある。今のバス路線が近い将来、なくなる可能性があった。「住民の方々に、危機意識や、主体的関与を促すことが目的でした」当別町企画課鰐淵真太郎さんが語る。毎月1回、通信を発

行し、身近な話題やアンケートを題材に、新しいバスのあり方に対する意識を醸成した。「当別町バス交通体系調査検討委員会」でも、バス路線、運行形態の検討を行った。

そして、平成18年、ついに実証運行を開始。全国でも例がない「官民共同一体バス」、当別ふれあいバス（通称・ふれバ）が誕生した。運営主体は、当別町、大学、医療機関、企業。ニーズの違う各々のサービスを一本化する際の苦労はいかほどであったか。熊谷康弘企画課長は、現状把握や問題点の整理、運行改善についての協議を何度も行ったことに加え、行政と民間の良好な協力関係が実現にあたっての大きな要素となったと話す。

そのキーパーソンの一人が、「有限会社下段モータース」下段寿之社長。自動車整備業であるが、10年程前からバス事業にも参画した。今回、社長の息子さんである代表取締役常務・下段







町の広報紙と一緒に全戸に配布されている「とうべつバス通信」。「ふれバ」の情報が親しみやすく発信されている。



「ふれバ」は使用済みの天ぷら油からつくる「バイオディーゼル燃料」を使用している。廃天ぷら油は、バス車内や役場、スーパーなどで回収されている。



バイオディーゼル燃料の精製方法を説明してくれる下段聡さん。燃料として再生する工程に約6時間かかるという。廃天ぷら油の回収から精製、バス燃料として使用するまでを一貫して行なっている企業はめずらしい。手間がかかるとしても、町の人々にとって良い仕組みになるものを提供していきたいという姿勢が、「ふれバ」を支えている。



「ふれバ」のダイヤを組んでいるのは、なんと企画課の職員。導入当初は、JRなどで勉強させてもらったそう。「実際運行とズレが生じることもあり、なかなか難しいです」とは、鰐淵さん。業務は、4月から同じ企画課の大石和彦さんに引き継がれた。駅への乗り継ぎ時間、分単位で各停留所を回る時間を考え抜いて組むダイヤ。



小中学生などに対する交通教育にも力を入れている。自分の行動により発生する二酸化炭素の量を学ぶ。実際に「ふれバ」に乗車して、公共交通機関をより身近なものと感じることになる。



鶴見みどりさん。「ふれバ」の運転手。平成18年「ふれバ」運行開始から業務に携わっており、現在のシフトは、市街地循環線。明るい笑顔と気遣いで車内の空気も和む。

聡さんにお話を伺い、整備中のバスを見せてもらう。京都で使われていたバスだが、もともと外国製のため、不足する部品を一から造ることも少なくないそうだ。「バスの調子が悪くとも、すぐに自社で整備できるのが強みですね」（聡さん）。

特筆すべきは、廃天ぷら油を再利用したバイオディーゼル燃料を導入していることだ。廃天ぷら油を燃料にすることでコストも抑えられるが、CO<sub>2</sub>削減、資源の有効活用など、環境面への影響を考慮している。作業部屋には、洗濯機より一回り大きな機器があり、中には町民の協力を得て回収された廃天ぷら油が入っている。

仕事の合間を見つけては、作業を繰り返すという。鰐淵さん曰く、ここに来る度に作業部屋のどこかが微妙に改良されているそうだ。「このやり方ではないのかなと、社長と毎日、試行錯誤ですからね」と下段さんは笑うが、町のバスを一貫して支える熱意がそこにはあった。

現在バス路線は4路線7系統。通勤や通学、高齢の方の足として活躍している。今後の課題は、こうしたニーズに応えるためにも、バスの経営を安定させ、軌道に乗せること。

「職員で日々、アイデアを模索しています」と熊谷課長が言うように、これまででも応援券やモビリティマネジメント教育活動など、身近にバスを浸透させるため、様々な企画を展開してきた。これが功を奏してか、小学生の間

でもバスタイヤの変更が話題になるという。ふれあいバスが町民の身近にある証だ。

「移動すること」。それは、極めて重要なことではあるが、便利な環境の中では、当然のことのように享受してしまふ。今はいい。けれども十年先、自分の移動手段は本当に大丈夫だろうか？ 当別の人々ならずとも考えさせられる。

そして、バスは走る。美しくも厳しい北の大地に根ざす人々の、その生活の確かなルートを守るために。

当別町ホームページ  
<http://www.town.tobetsu.hokkaido.jp/>

**「地域公共交通活性化・再生総合事業」とは**

鉄道・バス・タクシー、旅客船等の多様な事業に創意工夫をもって取り組む協議会に対してパッケージで一括支援する新たな支援制度。当別町地域公共交通活性化協議会は、平成20年度に「地域公共交通活性化・総合再生事業」の認定を受け、官民関係者の協働によるコミュニティバスの継続運行、バス待合所の設置、バス車内での音声映像案内システム導入などを実施してきた。こうした積極的な取り組みが評価され、平成21年度地域公共交通活性化・再生優良団体国土交通大臣表彰を受賞。今後も潜在利用者の発掘、既存利用者の利便性向上など、公共交通の利用促進策を進めていく。

<http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/transport/index.html>